

討論メモ

12月21日

「実力も運のうち、能力主義は正義か」

1. 12月は野瀬隆平さんに、著名なマイケル・サンデル氏の著作

「The Tyranny Of Merit」(日本語版の邦題は頭書のとおり)

を題材にして能力主義の功罪について解説いただきました。

米国は上院議員の全員が大卒という学歴社会だが、有名大学の入学者は裕福な家庭出身者が多いという顕著な傾向がある。子供は親を選べず、公正な競争の結果と云えるかという疑問が生ずる。

こうした事態は一例だが、社会のあらゆる分野で同様の現象が現れており、真に公正な社会を作るにはどんな工夫や対策が必要かが問われているとの説明があった。

2. 続いて出席者8名による討論となり、下記のような意見が出された。

・かつて西欧にはノブレス・オブリージェがあり、英国のパブリックスクールでもエリートの責任と連帯を教育していた。近年こうした観念が薄れて、富者あるいは勝者による敗者へのいたわりがなくなっているのではないか。

- ・米国には、そもそもノブレス・オブリージェの歴史がないのではないか。
- ・金持ちの寄付も減ってきているようだ。
- ・西欧では世襲の貴族社会があったが、米国では富者も成功者も、世襲ではなく、ゼロから出発している。成功は、全て自分の努力と実力のせいと思いがちなのではないか。

- ・成功を測る物差しが金だけになっている。
- ・かつては株屋や不動産業は富者になってもさほど尊敬はされてはいなかった。
- ・収入は少なくとも、実力を周りから認めてもらう喜びもあった。
- ・弁護士なども高収入だが、必要悪の職業だ。
- ・土木作業員などは賃金が低すぎて人が集まらなくなっている。
- ・熟練工など低学歴でも、なくてはならない人がいた。

- ・格差の是正には、制度設計が必要。英国は社会保障でやった。

- ・米国では貧困層からは大学に入りにくいというが、有名大学の学費は巨額だそう
うだ。むしろそこに問題があるのではないか。

- ・確かに米国の大学費は近年急騰している。

- ・日本でも大学の独立採算性が始まり、私大などは学費を上げねば経営できない。
- ・大学の研究室が小さな企業体ようになっており、研究費を貢いでもらうのに躍起になっている。
- ・社員と CEO の報酬の差が 300 倍というケースも出ている。制度でたとえば 10 倍以内と抑えるべきだ。
- ・岸田内閣の有識者会議もメンバーは社長ばかりで、新しい発想は期待できない。
- ・日本の経営者の質は低下している。日本は 30 年デフレが続き取り残されている。
- ・日本型の経営が米国の圧力などで姿を消してしまった。
- ・ビッグバンの影響が大きかった。竹中平蔵が現価主義を導入し、企業の財務内容が一挙に悪化し、倒産を恐れる消極経営に陥ってしまった。
- ・企業は儲かっても内部留保に回して、積極投資を控える体質になっている。
- ・あるべき道徳をビッグデータをもとに AI で決めようという研究がある。

・薩摩藩は小さな地域から西郷や大久保など維新の英傑を多数輩出したが、嘘をつくな、卑怯な振る舞いのするな、など人間としての基本を教え込んでいる。

・会津藩の“十の掟”も同様だ。

・米国でもカーネギーなどは成功後、社会に尽くしている。

・最近の若者は金銭欲も出世欲も薄くなっている。

・あきらめが半分と生活が保障されている安心が半分あるのではないか。

・サントリーの社長が45歳定年制を唱えて物議を醸している。

・四半期決算に代表されるような短期の成果を求めすぎている。

・大学の研究室も同じだ。短期派遣の研究員では長期の研究はできない。

・資本主義の担い手は誰なのか、

国家が経営するのか、

企業なのか、

組合とか社会が中心になんのか。

・株主資本主義の考え方が是正されるべきだ。日本には伝統的に、売主、買主、社会に貢献するという“三方良し”の思想がある。

・企業は短期の利益よりも継続が大事だ。日本には古い企業が世界一多い。

・技術の急速な進歩に人間が追い付いていけなくなっている。江戸時代は技術の進歩を抑制して成功していたのではないか。

以上